

佳作

私を変えた挑戦

福島県矢吹町立矢吹中学校

3年 小林 滯音

「私なんかができるわけない。」

そんなふうに思っていたのは、前までの私だった。でも、中学生になって私は少しずつ変わり始めた。それは、挑戦することの楽しさを知ったからだ。怖くても、不安でも、勇気を出して一步を踏み出したとき、私は、自分が思っていたよりずっと強いことに気がついた。

私の挑戦の始まりは、中学2年生の頃に行われた、自分の好きな本を紹介して戦う「ビブリオバトル」だった。最初は、賞をとりたいなんて一切思っていなかった。けれど、紹介する本の内容を書いているうちに、どこかで「いままでの自分を変えたい」という気持ちがわいてきて、気付けば、いつのまにか決勝戦まで勝ち進んでいた。結果は校内3位。うれしさもあり、悔しさもあった。そこから私は変わった。周りの友達や先生と話しているときに、1位のトロフィーを指さして

「来年は絶対に、あれ貰います。」

と告げた。本気だった。

そして今年も、ビブリオバトルは行われた。不安を抱えながらも勝ち進み、いざ決勝戦。結果は、校内1位。驚きとうれしさと胸がいっぱいだった。このときの達成感は、今でも忘れられない。有言実行できた自分に自信が持てるようになった。

私のもう一つの挑戦は「放送コンテスト」だった。最初に先生から勧められたときは、挑戦するか本当に悩んでいた。でも、2年生の頃のビブリオから自信がつき、思いきってやると決めた。

練習期間はたったの1週間。毎日、放課後に放送室に集まって必死に練習をした。何度も何度も原稿を読み、何度も何度も原稿をにらんだ。想像以上に練習は大変だった。でも、くじけることは一度もなかった。自分を信じて頑張っていたからだと思う。

そして本番当日。リハーサルでマイクの前に立ったときは、手が震えていた。でも、今まで練習してきたことを全部出し切ろうという気持ちが、だんだんとわいてきた。自分の発表の番になったとき、私はまるで人格が変わったかのように原稿を読んだ。会場の空気が一気に静まる。審査員の真剣な表情が私の目に映る。原稿の1行目を読み始めた瞬間に緊張していた気持ちが消えた。発表

が終わり、先生のもとに行く。発表してみてどうだったかと聞かれたとき、私は

「楽しかったです。」

と答えた。自分でも驚いた。原稿を読み始める直前まで、あんなに緊張していたのに、いつの間にか楽しさが勝っていた自分が不思議だった。そして結果発表の時間になり、私はただ祈る。結果は銅賞だった。自分の名前が呼ばれたとき、胸の奥から熱いものが込み上げてきた。

「やっぱり挑戦して良かった。」

と、心の底から感じた。自分を信じて挑戦したことが、こんなにも大きな自信になるなんて思っていなかった。

挑戦をすることは、自分を好きになることでもあると思う。あのとき勇気を出していなければ、私はきっと今でも「どうせ無理」と何もやらずに終わり、決めつけていたのだろう。挑戦をすることは、正直怖い。でも、自分の心に正直に、「やってみたい」「変わりたい」と思ったときは、その気持ちを信じてみることが大切なんだと私は思う。何事にも、挑戦してみなければ何も変わらないのだから。挑戦は自分の可能性を広げ、その中でしか味わえない達成感や誇りをくれる。だから、自分を好きになることでもあるのだ。

「信じる勇気が、私を変えてくれた」

私はこれからも、どんなことにも挑戦していきたい。なぜなら、私にはもう「できない」と思っていた自分に勝てた経験があるから。きっとこれからも迷ったり、怖くなったりすると思う。でも私はもう、目をそらさない。挑戦することをやめない。私は、挑戦をしてきて見つけた、「新しい自分」を何よりも誇りに思っているから。